今日も夏は終わらない

だるまや

注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

この物語は天邪鬼で口の悪い、でもちょっとだけ優しい男、泉　俊介が神様のいたずらで、艦これの世界に転生してしまうお話です。最初は都合上平坦な文が続きますが、少しずつほのぼの、コメディを目指す予定です。

目次

第0話 …… 1
第1話 …… 16
第2話 …… 28
第3話 …… 43
第4話 …… 60
第5話 …… 82
第6話 …… 103

第０話

「あー、次の授業だる」

泉俊介は極めてだるそうに言いながら大学の門をくぐり、銀杏並木の道をとぼとぼ歩きつつ、友人である楠悠佳と共に講義室を目指していた。

東京の郊外にあるこの大学はこれといった特徴もない私立大学で、彼自身大した勉強もせず適当に家から近いのを理由に選んだ。紹介しようにも正門からまっすぐに続いている銀杏並木ぐらいしか説明できない。

今日でついに７月も半ば、とうとう始まった前期のテストとうだるような本州特有の暑さが同時にやってきた。今日の最高気温は３５℃を超えると気象庁が注意を呼びかけていたこともあり、直射日光が二人の肌をじりじりと焼いていく。

ふと歩きながら右を向けば、テストをやらかしたのだろうか、目に光のない生徒がまるでゾンビのような足取りで次の授業に向かっているし、左を向けばどこぞのバカップルが、夏休みの計画を大声で話しながら自転車で泉たちの横を走り抜けて、早々と帰宅の途についていた。

おおかた授業をサボってどこか遊びに行くのだろう。彼女がいない泉としてはそのまま正門の前の交差点でトラックにでも突っ込んでいただきたいと半ば怨念がましく視線を送った。周りの空気に触発され泉もなんだか気が滅入ってしまう。

「あーほんと太陽うざい」

さらに追い討ちをかけるかように昼休みをはさんで次の授業は、必修のためでなければならない仏教の授業である。

自然と文句がでてきても何ら不思議ではないし、むしろこのくらいで我慢できている自分を褒めてあげたいぐらいだと泉は思っていた。

そもそも敬虔威尊な仏教徒ではないためそんな授業には一切興味ない。

だがこんな冒頭から魅力のなさそうな人物が主人公なのだから、読んでくれている人にはほんとに申し訳ないと思う。

しかし自己紹介をするうえで、誤解が無いようにまず先に伝えておきたいが、泉はこれといってイケメンではない。若干寝癖のついた髪の毛からも無気力さが伝わってくる。

付け加えれば切れ目なせいか目つきが若干悪く見られてしまい、周りからはいつもヤ

ンキーまがいだと揶揄されてきた。現在も伸び続けている１８０ｃｍの身長と口の悪さからそのイメージは定着しつつある。

とうとう今年で二十歳になったが、しかし有り体に言えば特に何も変わらないごく普通のどこにでもいる大学生である。

いや、むしろ隙さえあらば講義中に爆睡し、気分が乗らないと講義自体を欠席し、あまつさえ常に教授の愚痴を言っているあたり、泉自身自分でもあまりろくな人間ではないなとつくづく思う。

「大体俺は仏なんか信じちゃいねーよ、ったく」

「俊介は神様とかが嫌いだもんね～」

泉は性懲りもなくいつものように楠に愚痴をぶつけていた。

楠もいつも聞かされる愚痴に困ったようではあるが、しかし笑って返してくれている。というのも、泉と楠は付き合いが長い、いわゆる幼馴染というやつだ。

やはり幼稚園から大学まで一緒というのはなかなか珍しいらしく、周りにそれを言うとびっくりされる。まあ、びっくりされるのはそれだけではないのだが。

「しかし、せめてお前が可愛い彼女ならこんな授業の前から萎えなくて済むんだかな」

泉はは死んだ目で楠をみていつものようにつぶやいた。しかし楠は

「俊介～、そんなつれないこと言わないでよ～。僕は俊介と学校に行けるの楽しいよ！」

とやはりいつものように満面の笑みでこちらを見返してくるのである。

そもそもなんでこんな会話をわざわざお決まりでしているのか、それは主に楠の容姿に原因がある。

長めの黒髪を一つ結んだ髪型、ほんわかした雰囲気、一見そんじょそこらの女子より目鼻のパッチリした可愛い顔と１５５ｃｍ程の華奢な体格のおかげで、二人は何度もカップルと勘違いされてきたのである。

泉はもちろんそっちの趣味は全くないし、楠にそんな感情を抱いたことも一切ない。しかし楠はなぜかいつも言われるたび嬉しそうである。

ふとそんなことを思い出しつつ半ば古さだけ感じる講義棟の自動ドアをくぐり、汗をかきながら年寄りにはきついであろう階段を上る。時々楠がかまって欲しいのか、じゃ

れてくるのを泉が押さえつけているとやっと講義室についた。講義室は七割がた埋まりかけていて、前の席ばかり空いていた。大学生にもなって前の席を座るほど泉も人間ができていない。

空いてる席がないか周りを見渡しながら入ると、未だにカップルだと思っているのか何人かが泉を見てくる。投げつけられる視線には未だ慣れない。

「俊介どうかした？早く座らないと俊介の嫌いな前の席以外なくなっちゃうよ？」

視線に気を取られていると、楠が顔を覗きながら訊いてきた。

「ああ、わかってるよ。しっかしこんなクソ暑い日に２００人は入る講義室がほとんど埋まるとかどんな生き地獄だよ」

「今日はテスト前最後の授業だからね。普段サボってる人とかもみんなきてるからじゃないかな？」

「だろうな。にしたって暑すぎるぞ。せめてエアコンの近くに席を取らねーと俺は死

ぬ」

「俊介暑いの苦手だもんね。ほら！ちょうどいいところに席空いてるよ！急ご！」

早速席を見つけたのようで、楠は元気いっぱいにそう伝えると先に走って席を取りに行ってしまった。

泉には追いかける元気はないのでゆっくり歩いて席に座ると、となりでは既に楠がノートをとる準備をしていた。

「よくもまあこんな暑くてだるいのに真面目にノート取れるな。尊敬に値するわ」

泉は頬杖を付きながら綺麗にまとめられているノートを覗いた。相変わらず字の綺麗なやつだ。

「あ～、そんなこと言うなら、僕のノート俊介に見せてあげないよ？俊介困るんじゃないのかな～」

「ごめんなさい悠佳様。ノート写させてください、お願いします」

勝ち誇ったように楠が泉の持っていたノートをさらっと取り上げると、泉は手のひらを返して机に頭をつけた。なんせ泉は授業を基本爆睡しているため単位を取るには楠のノートを見せてもらうしかない。小学校から続いてきたいわば伝統行事のようなものだ。去年無事進級できたのも楠が辛抱強く面倒を見てくれた賜物である。

「うそうそ。でも俊介は頭良いんだからちゃんと勉強しないのはもったいないよ?」

「頭なんざちっともよくねえよ。いいか悠佳?ほんとに頭のいいやつはこんな二流大学にも通ってないし、単位を取るのに苦労しないし、ちゃんとノートも取るんだよ。俺は何一つ当てはまってないだろ?」

我ながら自分のクズっぷりを堂々と胸を張って話すのもどうかとは思うが。

「ははは…。いつにも増して自虐的だね。」

「そうか？でも事実だからな」

「でも俊介の場合どちらかというとただめんどくさがっているだけじゃない？僕は俊介ならなんでもできると思うよ！」

楠はいつものようにあたかも自分の言った言葉が真実と疑わないかのように笑ってみせた。

「毎度毎度そりゃどうも。ほら授業始まるぞ」

教授が入ってきたのを見て泉は楠の純粋な期待に少し照れくさかったのもあり、少々強引に話を終わらせると楠の頭を少し小突いて前を向いた。ここまでのやり取り、周りから見たらただの大学内にいるカップルのイチャイチャにしか見えないのを泉は分かっていない。

「あいた！俊介はすぐそうやって話変えるんだから」

不満げに若干頬を膨らませながら、しかし最後ははにかんで楠は授業を受け始めた。

ーキーンコーンカーンコーンー

長かった授業も終わり、開放感からか生徒たちも笑顔を見せながら帰る準備をしている。ほとんどの生徒はこの授業で今日は終わりのためその足取りは軽そうだ。なかにはより良い成績を取るために急ぎ研究室へ戻ろうとしていた教授を捕まえて熱心に質問しているのもチラホラ見える。時間は三時を回り、暑さも一段落してきたしてきた中、泉と楠は放課後の予定を話していた。

「ねえねえ、俊介!!このあと時間ある?」

泉が授業で使用した教科書をカバンにしまっていると、楠は机をバンと叩き何か待ちきれないといったような表情で話かけてきた。妙にテンションが高い。

「このあとか？まあ別に何もないけど」

「じゃあさ！駅前に新しいケーキ屋さんができたから一緒に行こうよ！」

嬉々とした顔でそう言うと、すぐさま立ち上がり早く早く！言わんばかりに服を引っ張ってきた。その姿はまさに主人になつく子犬のようである。しっぽがブンブンとふられているのがよくわかる。

言い忘れていたが楠は非常に甘いものが大好きであり、ご飯よりも甘いものがあればいいと常日頃から豪語しているほどの甘党だ。駅前にケーキ屋が出来たとなれば黙ってはいられないだろう。

「なになに、ケーキ屋？めんどくせーから一人で行ってこいよ」

頭の中で何時間もケーキ屋に並ぶのを想像してしまい、思わずげんなりとして言って

しまった。こんな夏の暑い日に店に何時間も並ぶのは、暑いのが大の苦手な泉にとって正直避けたい事態である。

「そ、そうだよね…。俊介あんまり甘いの好きじゃないもんね…」

そう言うと楠はショックで椅子に座ってしまい、さっきまで見せていた天真爛漫な笑顔も、一瞬で雨に打たれ続けている子犬のような表情になってしまった。目には若干涙すらたまり始めているし、さっきまでふっていたしっぽも動きを失ってしまった。

泉自身内心しまったと思い、なんとかこの場を挽回しようと思いを巡らす。このままでは周りになんと思われるかわからないし、なにより楠が悲しい顔をしていると泉もいたたまれない気持ちになってしまう。口はいつも悪いが泉にも人並み以上には楠を思う気持ちはあるのだ。

「あー! 悠佳俺がわるかったよ! その駅前? にあるケーキ屋一緒に行ってやるから! そんな泣くなよ」

泉は腕をしたにして顔を伏せている楠に対してそう伝えたが反応がない。よく見る

と少し肩を震わせて鼻をすすり始めている。

（あれ？もしかしてガチで泣いちゃったのか？）

こうなると付き合いが長いだけにわかってしまうが、楠は本格的に泣いてしまうとすぐには泣き止まない、そうなってしまえばもう手遅れだ。どう考えても傍から見れば可愛い子を泣かしている目つきの悪い男という構図が出来上がってしまう。満場一致でこっちが有罪である。

泉もさすがにまずいと焦り始め、何か泣き止む方法がないかと焦りながら考える。

「なあ。悠佳わるかったよ…。そんなに行きたいとは思わなくてさ。なんでもするから許してくれよ」

泉は最大限済まなかったという表情をしながら楠に謝った。いろいろ考えたが素直に謝るしか方法がないという結論に落ち着いたようだ。ちなみになんでもするは泉が楠によく使う全面降伏の意味を持つ言葉だ。これでダメならもう泣き止むまでひたすら横にいて面倒を見る羽目になる。なんとか泣き止んでくれと願っていると楠の方か

らクスクスと笑い声が聞こえてきた。察するに全部うそ泣きだったようだ。

「ふふふ。俊介はいつも僕のこと見破れないね。まだまだだなあ」

「やかましい。これ以上人の神経逆なでするなら帰る」

楠がいたずらっぽく笑いながら起き上がると、泉は騙された悔しさから一睨みするとすぐさまカバンを背負って講義室から出ようとした。今日に始まったことではないが何度も騙されるのは流石に気分が悪い。

「そんなつれないこと言わないでよ。早く行こ行こ！」

そう言うと楠は泉の腕をつかみ嬉しそうにケーキ屋へと連れて行くのであった。

さて、ほのぼのとした空気のなか唐突で大変申し訳ないが、実は二人はこのあと正門の前にある交差点で１０ｔトラックにはねられてしまう。不運にも運転手の信号無視で。ケーキが楽しみで仕方ない者と、仕方なくといった表情で足取り重く歩く者。二人はぶつかった瞬間に生死がわかってしまうほど無残に跳ね飛ばされ、いつも学生の笑い声かする楽しい通学路が一瞬で地獄へと化したのだ。

本来ならばここで泉俊介と楠悠佳の人生は終を迎えるはずであった。当たり前だが二人は某物語の吸血鬼のような便利な体を持ち合わせていなかったため、後は神様の審判によって天国か地獄にでも送られて余生?を過ごす流れになるはずだったのだ。

しかしなんの気まぐれかはわからないが、そのまま無事天国に向かうことはなかった。神様の気まぐれなのだろうか?二人はこれから急転直下のジェットコースターのような体験をすることになる。衝撃的で、摩訶不思議で、一生忘れることのないひと夏の出来事を。

「ー提督…。大丈夫ですか…？」

俺は微睡む意識の中、誰か女性に話しかけられているのをぼんやりと感じた。肩のあたりを叩かれているのを感じるあたりこれは悠佳か？あれ？でもこの声は悠佳じゃないぞ？てか、俺はさっきまで悠佳と一緒に歩いてて…。そうだ！気づいたら横からトラックが来てぶつかって…。あれ？じゃあなんで俺は生きてんだ？

泉は若干混乱しながらも呼び続けられている声の主を確認するためにゆっくりと目を開けた。

「よかった…。ようやく目が覚めましたね」

重いまぶたを開けてみると、隣にはメガネをかけた黒髪ロングのー通称　任務娘ーが書類をもって笑顔で座っていた。

第１話

　俺が目を開けると、そこには知らない女性が笑顔で立っていた。パッと見可愛かったが、生憎照れる程自分の気持ちは今冷静ではない。周りを見渡して見るに、どうやら自分はどこかの寝室に寝かされていたようで、背中にはふかふかとしたベッドがあることがわかる。小綺麗に片付けられている１０畳程の部屋にはベッド、机、本棚ぐらいしかなく、まるでガリ勉くんの勉強部屋といった風情で非常に簡素だ。
　ともあれベッドから俺は起き上がると、素直に疑問をぶつけてみた。
「…。あんた誰だ？」
「あらあら？提督は寝ぼけてらっしゃるのですか？私の名前は大淀ですよ？」
「大淀？変わった名前だな。じゃあもう一つ聞くがここは一体どこだよ？しかも提督ってなんだ？もしかして俺のことか？」
　大淀が困ったように笑うが、泉自身矢継ぎ早に疑問が湧いてきてそれどころではない。ついつい態度も喧嘩腰になってしまう。
「提督ったら、からかっているんですか？あなたは今日付でショートランド泊地に赴任する、日本帝国海軍所属泉俊介少佐でしょう？」

「おいおい、ちょっと待ってくれ。あんたが言った言葉で唯一合ってんのは泉俊介ってことだけだぞ。俺がいつ海軍なんかに入ったんだよ?」

「正確には一年ほど前でしょうか。士官学校を卒業してからは…、そうそう!横須賀鎮守府で艦娘の知識や運用方法を学んでいたはずですよ?」

大淀は持っていた書類に目を通し、泉の態度を不思議に思いながら伝えた。しかし泉は大淀の言葉がすんなりとは耳に入ってこなかった。

(どういうことだ?俺は確かにあの事故で死んだはずだ。なのにこうして生きている。まさか漫画みたいに別世界へ転生したってことか?じゃあここはなんなんだ?そんなことありうるのか?だめだ、意味がわかんねえ。)

俺は結論の出ない考えをやめると、とりあえずは彼女に聞いてみることにした。なにより一番知りたかったことを。

「わかった。じゃあもうひとつ聞かせてくれ。あんた楠悠佳ってやつを知らないか?髪を結んでて、こうちっちゃくて、女みてえな顔をした男なんだが」

身振りを交えてはいるが、泉の的を射ない表現に大淀は首をかしげつつも、その問い

に答えた。

「くすのき?さんですか?少なくとも私が知る限り思い当たる方はいらっしゃいませんけど…。誰かお知り合いの方ですか?」

淡い望みを込めた質問は、虚しく潰されてしまった。もちろんこの場にあいつがが居ない以上、最も考えるべき事実であった。しかし俺は心のどこかでそれを否定していた。そしてその言葉は自らの孤独を実感することとなった。しかしそれさえわかれば、ほかは半分どうでもよかった。まずはこの人に自分の身に起こったことを説明する他に手段がない。

俺は腹をくくると一つ息を吐いて言葉を吐いた。

「いや、知らないならいいさ。とりあえず、大淀さんだっけ?あんたに聞いて欲しいことがある。まあどうせ信じてもらえるとは思っていないが」

一言余計に言葉を付け加えて、自分の身に何が起こったのかをありのまま話し始めた。

「…そして目が覚めたら、この有様だ」

私は目の前にいる提督から耳を疑うような話を聞かされた。

要するに今目の前にいる「彼」は本来生きていた世界で交通事故に遭い、死んだと思ったらこの世界に生き返ったということらしい。

最初から信じることはできなかったが、細かい話しぶりを聞く限り、とても冗談で話しているといった雰囲気は感じない。彼の言うことは多分本当なのだろう。

もちろん確証があるわけではないが、まず私の知っている提督はこんな冗談をいうほどくだけた人じゃないし、口も悪くない。

そこで私は彼の言葉を信じ、〝こちら〟の日本における緊急事態を説明することにし

た。どうであれ彼はこのあと提督として前線に赴くのだから知る権利もあるだろう。
「そうですか…。あなたはつまり違う世界から私たちのもとへ〝転生〟してきた、というわけですね？」
「信じたくはないが、そういうことになるんだろうな」
舌打ちをしながら極めて不機嫌そうに彼は認めた。何をそんなに苛立っているのだろうか？

「でしたら、その言葉を私は信じたうえで、この世界で今起きていることを簡単に説明したいと思います。可能性の問題ですがこの話を聞くことで、あなたの元の世界へ戻ることができなくなるかもしれません。それでもよろしいですか？」

「ああ。今更戻ったところで地獄に行くのが関の山だ。聞かせてくれ」
彼は少し悲しそうに笑いながら、極めてどうでもいいといった感じでそう答えた。先ほどの楠という人物が関係しているのだろうか？あの表情は見ていて少し痛々しさすら感じる。だがそれは私にはわからないことなのだろう。私は頭を切り替えて話をすることにした。
「…この世界では人類の存在を脅かす存在がいます。その名も深海棲艦。彼らは突如世

界の様々な海に現れて人を襲い始めました。各国は力を一つにして戦ったんですが、奮戦虚しく敗退を余儀なくされました…」

そう。いま世界は危機に瀕している。１０年前、太平洋沖を航行中だった日本の新鋭イージス艦「さざなみ」が謎の生物に襲われ轟沈した。通称「八八事件」である。それからたった数日で、その生物は次々と世界の各水域を侵略し始め、人類は陸地への退避を余儀なくされたのだ。もちろん各国は自分たちの国に威信にかけてこの生物を駆逐するために躍起になったが、瞬く間に漁礁へと姿を変えてしまった。

ある国は自国内の植民地におびき寄せ、核を起爆する暴挙に出たが、結果としてそれは失敗し、焦土と世界の非難を生むだけであった

「そこに救世主として現れたのが艦娘という存在です」

「艦娘？なんだそれは？」

「我が大日本帝国海軍の艦艇の魂を受け継いだ、人型兵器ですよ。こちらをどうぞ」

持っていた書類を渡すと、泉は訝しげにそれを見た。

「これは…。普通の女の子じゃないか。もしかしてロボットなのか？それにしてはリアルすぎるぞ」

「未だに我々もその全ては知り得ません。しかし分かっているのは、彼女らは人間とほぼ変わらない姿でありながら、深海棲艦に唯一対抗できる存在だということです」

5年前、各国の対抗策も底を着き、世界はすべてを諦めかけていた。そんな時人類の前にある存在が現れた。妖精さんである。どこからやってきて何が目的だったのかはわからないが、彼らははっきりとこう言ったのだ。

「砂糖くれるです！」

いよいよ持って世紀末かと皆思い始めたが、半ば自暴自棄になりながら角砂糖を大盤振る舞いした。すると、彼らは大喜びし翌日再び現れた。一人の少女を連れて。

「はじめまして、吹雪です。よろしくお願いいたします！」

現れた少女は、自らを帝国海軍が所有していた駆逐艦吹雪の生まれ変わりだ、と説明した。まったくもって意味がわからないので、砂糖を与えながら妖精さんに話を聴くと、砂糖をもらってテンションが上がった彼らは鎮守府にある資材を用いて外見を作り、そこに艦の魂を吹き込むことで彼女を作ったらしい。しかも彼女が言うには深海棲艦と互角に戦えるというではないか。当初、軍上層部もまさかのファンタジー要素に耳を疑ったが、吹雪のやる気と藁もすがる思いで出撃させたところ、小型の敵（今はイ級駆逐艦に分類されている）を2隻も倒したのだ。これに味をしめたのか、政府は定期的に角砂糖を妖精さんに渡す「シュガー協定」を結び、妖精さんは艦娘を建造、軍は彼女らを鎮守府に配属し少しずつ勢力を取り戻していったのだ。

「…というのがこの世界で起きた大まかな出来事です。お分かりいただけましたか？」
「ちょっと待て。途中まではまだまともだったが、妖精がでて来てから世界観ぶち壊しじゃねーか！」
「そう言われても…。事実なのだからしょうがありませんよ」
泉のツッコミに対して、大淀も苦笑いで返すほかない。
「ちなみに言うのを忘れていましたが、私もその艦娘の一人ですよ？」
大淀は戦闘こそ行わないが、艦娘の人類の橋渡しや、事務など裏方の仕事をこなす立派な艦娘である。
「マジかよ!?そういうことは先にいってくんねーかな!?」
さっきまでのシリアスな展開が台無しである。泉があまりの急展開に頭を抑えていると大淀はこう続けた。
「そしてあなたには、今日付でショートランド泊地に向かっていただき、艦娘を指揮する提督として着任していただきます。頑張ってください」
「はあ!?ちょっと待ってちょっと待って？俺ががその提督になんの?!」

大淀はそう言うときりっと敬礼をして泉の方を向いた。綺麗な海軍式の敬礼である。しかし泉は大淀から衝撃的な一言を聞いて、意味がわからなかった。流石に話は理解できたが、なんでその役目が自分なのか納得もいかない。そもそも自分はそんな厄介事には関わりたくもないし、勝手にやってほしいのが本音だ。

「そんな勝手に決められても、行くわねーだろ！大体あぶねーじゃねーか！」

「あら？じゃああなたはこの世界でどうやって生きていくんですか？あなたが泉俊介である以上、もし逃げ出せば軍法会議で死刑はまぬがれませんよ？」

「そ、そうだけどさ。し、死刑かよ…。そんなマジか…」

死刑という重い言葉に、泉も顔が青ざめる。流石に二度も死ぬのはゴメンである。

「確かに責任の大きい仕事ではありますが、海軍としても、艦娘としてもあなたを全力でサポートします！是非受けてはもらえませんか？」

大淀は真剣な顔でそう述べると深く、頭を下げた。泉としても選択肢はないようなものだし、なによりここまで頭を下げられて断れるほど非情な人間ではない。

「…わかった。よくわかんねえけど、ここまで来たらなんでもしてやるよ。今更帰る場所もないしな」

「そうですか！ありがとうございます」

渋々といった表情で了承すると、大淀はほっとしたのか嬉しそうに笑ってみせた。そ

の笑顔は泉の中で、なぜか最近見たことのある誰かの笑顔と重なった。泉にはその笑顔を見るのが苦しかったため、急いで話を戻すことにした。
「しかし、なんでそこまでして俺に頼むんだ？元の中身とは違うわけだし、あんたも困るだろ？」
　そう言うと大淀は少し困ってしまった。確かに泉の言うとおり頭を下げてまでお願いするのは妙であるが、大淀ははっきりと断言した。
「現実として深海棲艦は飽和的に増え続け、私たちも頑張ってはいますが膠着状態にするのがやっとの状態です。そもそも艦娘を扱える人材が少ないので、猫の手も借りたい状態なんですよ。それにこの短い時間でしたが、あなたには艦娘を指揮するのに適役だと私は思いましたから」
「は？どこがだよ？自分で言うのもアレだが、大したことはできないと思うぞ？」
　はにかみながら答える大淀に、泉は戸惑ってしまった。どこをどう見たら適役になるのか泉は全くわからなかったからし、その期待が恥ずかしかった。
「まあまあ。理由は秘密ですが、あなたならきっと大丈夫です！頑張ってください」
「…何を隠してるのかわからないが、ほんとに期待だけはするなよ？なんせ何やるかもわかんないだからな？」
　あくまで念を押すと、大丈夫といった表情で大淀は話を続けた。

「提督の業務内容は、ショートランドへ着くまでにある程度私が教えますから安心してください。もし分からなくても、現地にいる秘書の艦娘が補佐してくれているので」
「え？もう現地に誰かいるのか？」
「ええ。あなたの記念すべき一人目の艦娘が待っていますよ」
　そう言われると、にわかに泉もそわそわし始めた。なんせこの小一時間で訳も分からず、戦いの前線に送られるのだから顔が引き攣るのも無理はない。
（大丈夫か…？まあ、なんとかなるか。今更慌てても仕方ないしな…）
　内心気持ちを抑えると、一つ疑問を大淀にぶつけてみた。
「ちなみにその艦娘ってのは誰なんだ？教えてくれよ」
「ええっとですね…。あ！この子です。駆逐艦ですね」
　大淀が持っていた写真を見せてもらうことで、泉はまた衝撃を受けることになる。なぜならそこに写っていたのは…

一緒に死んだはずの楠悠佳だった。

第２話

一四〇〇、泉は一人海軍の持つ、超高高度巡洋小型航空機で急ぎショートランド諸島へと向かっていた。

話によると、通常の輸送機では新たに出現した空母型の敵に撃墜されてしまうため、現在では大気圏をかすめるほどの高度でなければ、航行することは不可能なのだそうだ。

日本ははるばる横須賀から、大淀に急かされ説明も不十分ななか慌てて乗り込んだのがたった二時間前だが、いまだ提督としての実感はない。実際大淀から受けた説明はほとんど理解不能であり、しまいには指揮官として心得（マニュアル？）という分厚いＡ４冊子を強引に渡されると

「とりあえずそれを読んでいただければなんとかなります。頑張ってください！」

と、心底腹立つような満面の笑みで送り出された。泉の気分としては、三時間程前の自分をぶっ飛ばしてやりたい気分である。もはや後悔の念しかない。

だが、泉はもらった冊子に目を通しながらも、頭の中はひとつのことで一杯になっていた。

その原因はあの時見た写真にあった…

「悠佳…!!なんで!!」

大淀から渡された写真を見て、泉は思わず叫んでしまった。そこに写っていたのは紛れもなく楠悠佳その人だったからである。いや、よく見れば、長い髪を三つ編みにしていて、サイドは長く伸ばされているところを見る限り本人ではないのかもしれない。しかし泉が捨てていた希望を再び抱くには十分であった。自分がこんな状態に陥っているくらいだ。もしかすると、この子に楠が転生している可能性だって０ではないと考えたのだ。

「こ、この子は!?」

「まあ、人というか艦娘なんですが…」

「そんなんどっちでもいい！この子は一体誰なんだ！」

泉が声を荒げてしまうと、大淀も少し驚きながらも書類に目を配り、よどみなく答えた。

「まあ、落ち着いてくださいよ。この子の名前は時雨といいます。白露型駆逐艦の二番艦ですね。最近佐世保で建造され、それからは内地で待機していましたが、今回の赴任によってこの子もショートランド泊地に配属になりました」

「時雨か…。じゃあこの子がおれの秘書艦になるってことなんだな？」

名前こそ違うがまだ可能性はあるはずだと泉は考えた。最近建造されたというのも気になる。

少し前のめりになりながらも泉は念を押した。

「その通りです。軍としては今のところ時雨しか配属できませんが、向こうには建造できる施設なども完備されているので、是非戦力の強化を図ってください」

そう言うと、大淀は少しきまずそうにこう続けた。

「本来であれば、電か五月雨が秘書艦になる予定だったのですが…。急遽北方海域への哨戒任務が命じられてしまいまして、少し異例の事態なんです」

「そうなのか?」

「はい。時雨はまだ秘書艦としての経験もほとんどありませんし…。今回ばかりは、上層部の意図がわかりかねます」

少し考え込みながら、そう伝えると泉はこのあと会うであろう時雨に、期待を寄せずにはいられなかった。

（マジか！まさかとは思うがやっぱり時雨って子は悠佳じゃねーか？てかここまで偶然が重なるとそれしかないだろ！）

泉はそう結論づけると、早速時雨に会いたくなってしまい仕方がなかった。見ての通り単純な男である。

「そっか。まあ大体わかったよ。とりあえず俺はその時雨っていう子と力を合わせて頑張ればいいってことだろ？」

「ま、まあそういうことになりますかね？では早速ですけど、時間もないので着替えていただき、詳しいお話をしたいと思います」

そう言うと二人は場所を移し、話を続けたのだった。

「てことは、ショートランドは南方方面が担当なのか…。にしたって最前線すぎるだろ…」

泉も思っていた以上の激戦地区に放り込まれたことを実感し、頭を抱えてしまう。

そもそも、現在の日本の状況は戦線を拡大しつつあるようで、冊子によればショートランド基地は、ラバウル基地よりさらに南に位置する、事実上の最前線ということらしい。軍上層部も一大攻勢の橋頭堡とするためにこの基地を作ったようで、設備も十分揃っており、その期待度がひしひしと伝わってきた。

「まあ、任務やすべきことはなんとなく書いてあるし、なんとかなるか」

強引に自分を納得させると、気づけばもう航空機は着陸態勢に入っていた。

強い振動と気圧差による耳の違和感は辛かったが、無事泉は基地に到着することができた。

「うわ…。あっつ。何度あるんだよ」

照り返してくる太陽に泉は思わず不快感を表した。着ているのが第一種軍装なのもあるが、赤道に程近いこの島は、熱帯特有の湿気を空気に含んでおり、泉としては回れ右でクーラーの入った機内に早速戻りたくなった。

しかしここまで来てそうも言ってられないため、遠路はるばるここまで自分を運んでくれた操縦士に礼を言うと、隣接している基地へと向かった。この基地には簡易的ではあるが飛行場も建設されており、かなりの敷地面積を誇っていることがわかる。

泉は道なりに歩いていると、正面に基地の入口が見えてきた。が、それと同時に誰かが門の前に立っているのがわかった。

少しずつ近づいていくと、それが自分の秘書艦である時雨だとすぐにわかった。

しかし泉はそれが分かった途端、我慢できず走り出してしまった。

「やあ、貴方が新しい提督かい？僕の名前は…」

「おい!!やっと会えたよ！悠佳か?!大丈夫だったか!?」

そうまくし立てると、泉は時雨の肩を強くつかみ思いっきり揺らしまくった。泉の顔には焦りが見て取れるし、一方時雨の頭はブルンブルン振り回され、もはやグロッキーである。

「ちょ、待って待って！ストップストップ!?なんのことだい!?」

「待ってられるか!!なあどうなんだ!!悠佳なのか!?悠佳なんだろ!!」

「ち、違うよ!!僕は白露型駆逐艦、時雨!!だからストップ！」

「ぐは!!!」

時雨はあまりの展開に、肩を掴んでいる犯人を黙らせるためつい鳩尾に頭突きしてしまった。流石に目の前の人物が提督なのはわかったが、こちらを見た途端に走り出しあまつさえ急に肩を掴まれたのでは挨拶すらままならない。

時雨の一撃で我に返ったのか、泉は肩を離して目の前にいる人物の話に耳を傾けることにした。

「全く…。自己紹介もなく女の子の体に乱暴するのはどうかと思うよ？」

「す、すまん。てっきり悠佳だと思って、そうしたらいてもたってもいられなくて」

泉は深々と謝罪すると、時雨は少し笑ってみせた。時雨自身悪い人物だとは思っていなかったので、話さえ聞いてもらえればどうとでもなる。

「まあいいさ。これから僕たちは共に戦う仲間なわけだしね。聞き忘れていたけど名前を教えてもらってもいいかな？」

「ああ…。俺の名前は泉俊介だ。さっきは急に驚かせて悪かった」

「そんなあやまらなくってもいいってば。ところでさっき言ってた悠佳って人は誰だい？すごく慌てていたようだけど」

急に泉が襟をただし始めたため、時雨はその態度に苦笑しながらも一番気になってい

たことを聞いてみた。あれだけ慌ててるのを見るに、相当何かあったのだろう。純粋に気になってしまった。

一方泉は自分が抱えていた重要なことを聞こうと思っていた。もはや答えは出ているようなものだが、これを聞かずにはここに来た意味がないのだから。

「いや…。まあ話せば長くなるんだが…、そのまえにひとつ聞いてもいいか？」

「なんだい？」

不思議そうに時雨が反応すると、泉は少し出す言葉に躊躇しながら

「君は、どこからか転生してきた記憶とかないか？てか俺のこと覚えていないか？」

一見冗談でも言ってるのかと思ったが、泉の目を見る限りそこには真剣と、そして何か縋るような何かがあった。

「僕が覚えている限り、提督に会ったことはないと思うな。前の僕は軍艦だったわけだ

し」

「そうか…」

泉は改めて自分が抱いていた希望が目の前で崩れていくのを感じ、思わず座り込んでしまった。確かにそんな虫のいい話があるわけがないとどこかでわかっていたつもりだったが、流石に二度も裏切られれば流石に堪える。

その姿を見た時雨はなんだかいたたまれなかった。先程まで自分に掴みかかってきた勢いはなりを潜め、顔が青ざめつつあるし、なによりこれから支えあう相手が辛そうなのは時雨としても悲しいのだ。いったい何があったのだろうか？湧き出てくる質問を泉に聞いてみることにした。

「じゃあ僕の質問にも答えてもらっていいかな？その悠佳って人に何があったんだい？僕は提督がすごく辛そうに見えるけど、よかったら教えてもらえないかな？僕は提督を助けたい…」

出来るだけ優しく、そっとなでるように聴くと、隣にしゃがみこみ泉の答えを待った。

その時顔を上げた泉には、隣にいる人物が長い間、それこそ物心ついた頃から一緒だった楠にみえたのだ。もちろん違うとわかっているからこそ心が強く締め付けられたが、同時に楠ではない誰かが初めて自分を励ましているようにも感じた。

その知らない暖かさを感じると、なぜか不思議と前を向ける気がした。ある意味今までそんな気持ちにさせてくれたのは紛れもなく、隣にいた時雨であることを改めて理解する。自分がこれまで孤独に怯え、楠に依存していた事と同時に。

そして泉は心に決めた。この世界で生きることを。

もちろん楠を諦めたわけではないしこれからも探し続ける。だが、同時に今、隣にいて自分を励ましてくれた、この小さな女の子を守るということを。自分のここでできることはそれぐらいしかないのだろう。

だからこそそれに向かって前に進むことを決めた。

泉はひとつ息を吐ききると、心配そうに見守る時雨の頭を撫でて少しわらって見せた。そう。ここには先程までいた馬鹿な自分はいない。そう思うと心が軽くなった。

「ああ、大丈夫だ。ありがとうな、時雨」

「あ、やっと僕の名前を呼んでくれたね」

少しはにかみながら嬉しそうに答えると、泉はさらに大きく笑った。もうそこには時雨しかいなかった。

「そうか？俺はずっと名前で言ってたつもりだったがな。なんならちんちくりんってあだ名でもいいんだぜ？」

「馬鹿にしないでくれ。僕は毎日牛乳だって飲んでいるし…。そのうち提督の背だって超えてみせるさ」

すねたように頬を膨らませている時雨を見るのが泉にはなぜかとても可笑しかった。

「ははは！そうかそうか。じゃあ牛乳は切らさないようにしないとな。」

そう言うと泉は立ち上がり土埃を払うと時雨の方を向き手を差し伸べた。時雨もその手をつかみすっと立ち上がる。

空は少しずつ赤みがかってきて、太陽も昼に見せていた暑さを少し和らげている。

「さて。時間も時間だし中へ入ろうぜ。といっても俺は基地の中なんて全く知らないがな」

「じゃあ僕が案内してあげるよ。今日中にある程度わからないと明日の仕事にも影響がでるしね」

前を歩く時雨の後ろ姿を泉は少し見つめていた。その背中は小さく、でもとても頼もしかった。

「提督？早くしないと日が暮れるよ？」

「わかったわかった。時雨はせっかちなタイプか？」

「言いだしたのは提督じゃないか」

「それもそうだな。すまんすまん」

振り返り不思議そうにコチラを見つめる時雨に、泉は謝りながら、背中を追いかけた。

こうして二人の新たな生活の幕が開いたのだった。

第3話

基地の中を軽く一回りしたところで、二人は食堂へと向かうため廊下を歩いていた。現代社会には珍しい木造の基地だが、新築ということもあり弓なりはせず、木の心地よい香りが泉の鼻をくすぐってくる。

なんでも火災等が起きた場合、鉄筋よりも木造の方が強度も下がらずメリットが多いのだとか。ソースはもちろん隣にいる時雨だ。

「提督、時間も時間だしそろそろ晩御飯にしない？」

隣を歩く時雨が提案したのを聞き、泉は自分が朝からなにも食べていないことに初めて気づいた。

「ああ、もうそんな時間か。確かにそろそろ飯にするか」

窓を見れば、外はもう夜の帳が降り始めていた。海からも涼しい風が吹いてきたため

体感的にも過ごしやすくなってきたようだ。

「ところで、ご飯は誰が作るんだ？」

「妖精さんに頼めば作ってもらえるよ。場合によっては自分たちで作ることもあるけどね」

「また妖精さんか…。この基地ほんとに大丈夫か？」

泉はその言葉を聞いて、先ほど見た光景を思いだし苦笑いせずにはいられなかったのだった。

それは基地をふたりで回っているときまで遡ることになる。

泉は時雨の案内を受けながら基地をゆっくりと回っていた。

門をくぐって正面には大きな二階建ての建物が見え、右には艦娘の傷を癒すために必要なドックと海が遠くだが確認出来た。

「今目の前に見えるのが、提督の司令室や食堂がある総合棟だよ。ここからは見えないけど裏には僕たちの武器などを作る工廠があるし、うん、設備は揃ってるね」

時雨はてきぱきと案内をこなしながらもこの基地の設備の豊富さが少し嬉しかった。やはり設備が十分であれば自分の力も発揮できるというものだし、自分たちが期待されていることがひしひしと伝わってくる。とても光栄だし、改めて頑張ろうという気持ちになれた。

しかし一方ここで泉はひとつ違和感を覚えた。

「なあ、時雨。この基地には誰もいないのか?」

そう、基地から全く人の声や作業音が聞こえないのである。基地内にはほとんど音という音がしていないため、ただただ海から波がさざなむ音だけがこだましている。まるで廃園になった遊園地のようで若干気味が悪い。少しずつ外が暗くなっているのも雰囲気を醸し出している。

怪訝そうに聴くと、時雨は一瞬不思議そうな顔をしたが、質問の意味を理解すると納

得したように泉に答えた。確かに彼らを紹介するのを忘れていたし、提督がそう思うのも無理はない。

「ああ、紹介が遅れてたね。ちょっと待って…。おーい!!みんな出ておいでー!!!」

「うお?!なんだなんだ?!」

時雨が急に大きな声で誰かを呼ぶと、いろんなところから小さな生き物（妖精さん）がたくさん出てきた。どうやら初めて見る人物のためこっそりついてきてたようだ。草むらからも急に出てきたため、泉は何が出てきたのかとビビってしまった。こう見えてお化けの類は大の苦手である。

妖精さんたちは時雨の足元に急いで整列すると、びしっと綺麗な敬礼をしてみせた。見た感じ５０人ほどいるがこれでも一部らしい。見る限り指揮系統はかなり統率されているようである。

「提督。この子達がこの基地を支えてくれている妖精さんたちだよ」

「え?これがか?思ってたのとなんか違うな」

思わず正直な感想を口に出すと妖精さんは口々に文句を言い始めた。流石に初対面の人物にそんなことを置いわれれば妖精といえどもカチンとくる。

「シグレ、コノヒトハダレデス?」「シツレイナコトヲイウヤツデス」「オトトイキヤガレデス!」

初回から泉は随分と信頼を失ってしまったようだ。

「まあまあ…。みんなこれから一緒に頑張ろうよ」

困ったように笑いながら時雨が言うと、妖精さんたちは顔を見合わせて相談し始めた。どうやら時雨にはだいぶ心を開いているようで、素直に耳を貸している。

「シグレモコウイッテルデス?」「シカタナイノデユルシテヤルデス」「カンシャシロデス!」

（なんだこいつら？てか口悪くね？）

泉はまた口に出てきた感想を慌てて飲み込むと、軽く自己紹介し時雨から妖精さんの役割を聞いた。

なんでも妖精さんによって担当も決まっているらしく、作業服を着ていたり、ヘルメットをかぶっているものは工廠担当、軍服のようなものを着ているのは実戦担当といった具合だ。実戦担当では航空機に乗ったり、射撃などを担当するそうだ。

「こんなちっちゃいのに、なんでもできるのか！そりゃすごいな」

「チッチャイトイワレタデス？」「ヤカマシイデス」「ヒトコトヨケイナノデス！」

泉が心底感心していると、妖精さんは聞き捨てならなかったようでまたぶーぶー言い始めた。どうもあまり相性が良くないようである。

そのやりとりを見ながら時雨は笑っていると、ふと思い出したように泉に提案した。

「そうだ提督。ちょうどいいから妖精さんに頼んで建造してみようよ？ちょうどそういう任務があったはずだし」

「そうだっけか？どれ…。あ、ホントだ。よく知ってるな」

泉はカバンに入れていた任務書を見直すと、確かに「工廠ニオイテ資材ヲ活用シ、新シイ艦娘ヲ建造サレタシ」とちゃんと書かれていた。

それを確認すると、時雨は少し胸を張って自慢げだった。

「一応僕は提督の秘書艦だからね。それぐらいのこと把握しているのは当たり前さ」

「そうかそうか。ちっちゃいのに時雨はえらいなー」

若干時雨の態度にイラっときたのか泉はぐしゃぐしゃと頭を撫でた。別に特段の理由があってイラついたわけではないが、ちっちゃいのに威張られるのは非常に癪に障る。

「や、やめてよ。いたいじゃないか。流石の僕でも怒るときは怒るよ？」

「わかったわかった。話を戻そうぜ？建造は妖精さんに任せればいいのか？」

「話を脱線させているのはどっちだい…。まあ、そういうことになるね。今のところ建造ドックは二つあるけどどうする？」

「まあ、資材には余裕があるし二隻建造しよう。戦力はあったほうがいいだろうし、なによりお前一人じゃ淋しいだろ？」

「ま、まあそうだね…。ありがとう…」

泉がさも当然のように提案すると、時雨は顔を赤くしてしまった。最も泉は全く気づいていないのだが。

「ところで、妖精さんにはいくら資材を渡せばいいんだ？てかどうやって作るんだよ？」

「あ…、ああ！作り方は僕も知らないんだ。なぜかこの子達が絶対おしえてくれないんだよ。でもちゃんと資材さえ渡せばちゃんと作ってくれるよ？僕が保証する！」

やっと自分たちの話題になったのか、さっきまで各々時間を潰していた妖精さんが再び集まり始めた。妖精だって空気は読めるのだ。

「なに慌ててんだ…？まあそういうことならわかったよ。で、渡す量はどれくらいだ？」

「うーん、最初だし妖精さんに任せてみるのはどうかな？もちろん資材はあんまり多く使えないけど」

「まあ、よくわからんけどそうするか」

「決まりだね。じゃあ妖精さん。お願いできるかな？」

「「「リョーカイナノデス」」」

そう言うと妖精さんは各々持ち場へ戻っていった。てくてく歩いてく姿は確かに愛嬌がある。

「どんな奴が来るんだろうな？」

「そこに関しては妖精さんの気分次第だからね。僕にもわからないけど楽しみにまとうよ」

「だな。次はどこに行くんだ？」

「じゃあ次は入渠ドックに行こう。僕たちが傷を治すためのところなんだけど、実は中は温泉なんだ」

「へー、そりゃ珍しいな。俺も入れるのか？」

「て、提督は入れないよ!!当たり前じゃないか!!」

大声を出してスタスタと言ってしまう不思議そうに泉は思いながらそのあとをついって行った。

そして二人は無駄話をしつつも、食堂に着いていた。

総合棟にあるこの食堂は艦娘たちも利用するため非常に中は広く、泉の通っていた大学の食堂に似ている。二人は真ん中に陣取ると食券販売機へと向かった。よくあるフードコートのような造りで、いわゆるセルフサービスというやつだ。奥には妖精さんたちが後片付けをしていた。

「どれどれメニューは…？てカレーしかねーじゃん」

「海軍といえばカレーだからね。他に食べたかったら前もって言っておくといいよ」

時雨はそう言うと妖精さんに食券を渡し、カレーを既に受け取っていた。泉もそれに倣うと、三角巾を可愛く巻いた妖精さんが、協力してカレーをよそってくれていた。泉は軽く感謝を述べると、席へ戻り急いで食べることにした。カレーは熱いほうがいいというのは泉のポリシーの一つである。

お互いいただきますを言い食べ始めると、徐々に話は泉の話題になった。

「でも提督はほんとにこの世界の人じゃないのかい？僕も最初はなんの冗談かと思ったよ…」

時雨も案内の途中に当然そんなことを言われたので、からかっているのかと思った。だが話を聞くにつれてそれが本当だということが泉の必死さから痛いほど伝わっていた。

「俺もこれが夢ならどんだけいいことかとおもうよ。気づいたら訳も分からずお前の提督だからな。正直俺も実感がない」

「そうか…。その、悠佳って人もいつか会えるといいね」

「そうだな。でもまあ、ここに来たのも何かの縁てやつだろうし、あいつを探しがてら頑張ってみるさ」

そう言いながら泉は明るく笑ったが、時雨は少し不安になってしまった。この人の中に果たして自分は大切なものとして存在しているのだろうか?もちろん恋愛感情とは全く違うが、楠について楽しそうに語る泉を見ると、なぜかとても切なかった。自分の存在が認められないからか、それとも単純に戦いで勝てないと思ったからなのか、頭の中ではいろんな思いが渦巻いていく。それを抱えたままでいるのはただただ苦しかった。

「て、提督は…。僕の提督になるのは…嫌かな?」

時雨は思わず聞いてしまい後悔した。内心何を言っているのか自分でも意味がわからなかったし、なにより恥ずかしい自分の皿にはもうほとんどカレーは入っていなかったが、ついスプーンでご飯の粒をつつかずにいられなかった。だが泉はそんなことに全

く気付かず、不思議に思いながらも時雨の答えにはっきりと答えた。

「いや、俺はそんなことないぞ？確かに未だ慣れないことも多いが、新鮮だと思えばそれまでだし。なにより時雨が秘書艦のおかげでなんとかなりそうだしな」

そう笑ってみせると、時雨のもやもやは一瞬で晴れた。自分でも単純だとは思うが、その言葉を聞いただけでつい笑みがこぼれてしまいそうだった。

「そうか…！ならいいんだ。変なことを聞いてごめんね」

「いや、別にいいけどな。そういえば建造が完了するのがもうそろそろか？」

時計の針を見ると、もう八時半を過ぎていた。

「うん。もう工廠に行けば会えるんじゃないかな？」

「じゃあ、とっとと片付けてお迎えにでも行くか。待たせるのは若干気が引けるしな」

そう言うと急いで食器を片付け、二人はまだ見ぬ仲間を出迎えるため工廠へと向かった。

「時雨はやっぱり仲間が増えるのは嬉しいか?」

「そうだね。やっぱりみんなに会えるのはすごく楽しみだよ」

時雨はやはり自分の仲間が増えるのが嬉しいようで、向かう足取りもどこか軽い。泉も早足で追いつきながら歩き、とうとう二人は工廠に到着した。

大きな鉄の扉がそびえ立つその建物は、なかなか頑丈にできており、足元を見ると妖

精さんが並んでいた。どうやら泉たちを待っていたらしい。

「じゃあ、みんな。連れてきてもらえるかな？」

挨拶もほどほどに時雨がそう伝えると、妖精さんたちは頷き、何処かへ行ってしまった。

「あれ？あいつらどこに行ったんだ？」

「多分呼びに行ったんじゃないかな？」

「そうか。なんか緊張してきた…」

「僕もだよ。どんな子が来るのかな…」

二人共興味半分、不安半分といった表情でまだ見ぬ仲間を待っていた。すると、目の前にある扉がゆっくりと開いた。どうやらもうすぐそこにいるようだ。

そして開いた先にいたのは…

「よ！あんたが提督か？よろしくな！」

「こんにちは！提督さん、よろしくね！

ヤンキーとわんこだった。

第４話

○九○○。時雨はいつものように提督を起こしていた。朝が弱い泉は自分で起きることはほとんどなく、時雨が起こすのが日課になりつつある。

「提督…。朝だよ。もう起きなきゃ」

「なんだよ…まだ寝かせろよ…」

「もう…。一昨日もそう言って、本部からのお客さんを待たせたじゃないか。早くしないと摩耶を呼ぶよ？」

「あいつめんどくさいんだから呼ぶなよ…。わかった起きる起きる」

時雨がゆさゆさと揺らしてくるため、泉は仕方なく布団から出た。ちなみに前回起きなかった場合、摩耶が乗り込み泉の首を締め上げるというエキセントリックな起こされ

方をしたので、もうそんな事態はゴメンである。
今日で摩耶と夕立が来て一週間が経つ。まあ、摩耶とは常に些細なことで喧嘩が起きるし、夕立はすぐ構って欲しくて仕事の邪魔をするため毎回泉はへとへとになっているが、これといって大した出来事もなく日々を過ごしていた。泉自身も少しずつ仕事を理解し始め、ようやく基地としても機能し始めている。

「じゃあ僕は先に執務室へ行ってるから、早く来てね。任務もまたたくさん来てるみたいだし」

「へえへえ。急いでいけばいいんだろ…。ふあぁ…」

泉が着替えて執務室へ入ると、既に三人は揃っていて、各々好きにくつろいでいた。摩耶はソファに座り、鼻歌を歌いながら自分の艤装を磨いているし、夕立はこの前教えた紙飛行機を量産しながら部屋をちらかしている。もともとこの部屋がそこそこ広いため、四人が揃っても狭く感じることがない。

「よう提督。今日も起きるのおせーな。俺なんか七時に起きたぜ！」

摩耶の少し上からの態度が泉にはムカついたようだ。

「ああ。お前みたいにババアじゃねえから規則的な生活ができねえんだよ」

「あぁ!?誰がババアだって!?ぶっ飛ばされてーか!?」

「朝からキャンキャンうるさいな。だってお前艦歴で言ったら８０超えてるババアじゃん」

「な……！」

「大体そんなに体力余ってんならこのクソ暑い中コートでも着てランニングでもしてこいよ。それならいくらお前でも脱水症状で静かになるだろ？」

「提督……！この摩耶様を怒らせちまったようだな!!」

もはや一触即発の険悪な雰囲気を見た時雨が、ため息を付きながらも止めに入る。大体いつもこのパターンで時雨が止めないと、摩耶が先に手を出しそうで提督の命が危ない。

「二人共そこまでにしなよ。ほら、提督が今のは良くないんだから謝るべきだと僕は思うよ?」

「だってよ提督！謝るってんならこの摩耶様の大きな器に免じて許してやってもいいんだぜ?」

勝ち誇ったようなドヤ顔が喧嘩に拍車をかける。

「誰が謝るかこのヤンキーが。お前のお猪口みたいな器じゃ溢れちまうから遠慮するわ」

「あ!?やんのか!?」

「提督さん。飛行機あんまり飛ばないっぽい？直して直して～」

「だめだこりゃ…」

喧嘩もひと段落したところで時雨は提督に今日の任務を伝えていた。それを聞いてほかの二人も集まってくる。

「提督。今日は出撃任務が来てるよ」

「三日前に出撃したのにまた来たのか。今度はどこに出撃だ？」

「えーっとね、南西諸島沖だよ。最近敵の前衛部隊が多数補足されてるみたいだね」

それを聞いて気になったようでほかの二人も集まってくる。

「敵の編成はどんな感じっぽい？」

「敵は五隻のようだね。軽巡、雷巡、駆逐艦で編成されているらしいよ」

「ふーん。まあこの摩耶様なら軽く蹴散らしてやるぜ!!」

重巡に摩耶としては火力で押せるのが嬉しいのか、自慢げに胸を張っていた。

「そんなこと言ってまた前みたいに油断して被弾すんなよ？お前の修理代高くつくんだからな？」

前回の基地海域では最後の最後に敵の魚雷を受けて小破になってしまったため、摩耶としても痛いところを突かれてしまった。ほかのふたりは無傷だったため余計に恥ずかしい。

「わ、わかってるって。提督しつこい」

「ならいいけどな。時雨、出撃の時間はどうする？」

「早く出撃したいっぽい？」

「じゃあ、一二〇〇でどうかな？それなら夕方までには主力部隊と会敵出来ると思う」

「そうするか。じゃあ一一三〇に港集合でいいか？」

「りょーかいだぜ!!」

「じゃあそれまで解散。俺はねるから時間になったら起こして」

「いい加減仕事しろや!!」

摩耶にひっぱたかれ、渋々泉は机にある山のような書類を片付けることにした。

「ザザザ…。提督？時雨だよ。無線はきこえてるかな？」

「ああ、よく聞こえてるよ。そっちの方はどうだ？さっきの敵の戦闘で何か問題ないか？」

「僕たちは大丈夫。天気もいいし、これなら索敵の心配のなさそうだよ」

「それならいい。じゃあそのまま進路を東にとってくれ。一時間もすれば敵の艦隊が視認できるはずだ」

「了解。じゃあまた後でね」

そう言って切れた無線のヘッドフォンを外すと、泉は一人肘を付きながら執務室で

ぼーっと座っていた。

そもそも艦娘と深海棲艦はあの姿のまま砲雷戦を行うため、提督はその危険性から随伴することができない。そもそも向こうの攻撃は既存の艦船ではあっという間に轟沈してしまうため、ついていく手段がないのだ。

「まああの三人なら大丈夫か…」

そう呟くと不安を消すように残っていた仕事を片付けることにした。

その頃時雨たちは、一路東へまっすぐと向かっていた。途中駆逐艦のはぐれ艦隊と戦闘になったが、反撃を受けずに無傷で撃破できたため、上々といった立ち上がりだ。

「しっかし提督のやつ朝からむかつくぜ。よりによってババアなんてよ」

必然的に海にいるのは三人だけなので、敵に遭遇する危険がなければこうした無駄話をすることも多い。最近の摩耶の話題は提督の話ばかりだ。

「夕立もおばあちゃんっぽい？それは嫌かも～」

「ま、まあ提督は朝が弱いからね。ホントはそんなこと思ってないと思うから大目に見てあげようよ」

時雨がそう言って二人をなだめていると、摩耶は時雨が提督をかばっているのが気に入らなかったらしく少し意地悪をしようと考えた。

「へえ～、そいえば時雨はよく提督のことをかばうよな？なんかあるのか？」

「な、なんかってなにさ」

「いや、俺たちがここに来るまでに提督と何かあったんじゃねーかなって思うんだよ俺は」

「な、何もあるわけないじゃないか！からかうのはやめてよ」

ニヤニヤしながら聞いてくる摩耶に、時雨は少し図星を突かれて慌てて否定した。

確かに提督はいつも仕事をサボるし、子供扱いしてくると時雨も思っていた。でもそれだけの印象にとどまらなかったのは、食堂で見せたあの目だと思う。自分は知らない相手だけど、あの時その人を思い浮かべた目は優しそうで、必死で、少しかっこよかったと思う。それがもし自分に向けられたら、幸せなのかなとも思っていたのだ。

しかしそんな乙女なことを言ってしまえば、目の前の人物に何を言われるかわかったものではない。この気持ちは誰にも話したくないのだ。

「あれ～？その反応は怪しいな？この摩耶様におしえろよ、誰にも言わねえからさ！」

「だから、なんでもないって！てか摩耶のその喋り方おばさんみたいだよ？」

「な、なに…。お前までそういうこと言うのかよ!!!やめろよ、全く!!」

思わぬカウンターをくらい摩耶が突っ込んでいると、観測をしてくれていた妖精さん

が大きな声で叫んだ。

「ワレ、テキカンミユ!!!カズ五!!サンジノホウコウ、キョリ四〇〇〇〇!!」

「きやがったか!!!時雨、陣形はどうする!?」

戦闘になった場合、基本的な判断は旗艦が下すためここは時雨に任されることになる。

「単縦陣で行こう。うまくいけばT字陣形に持っていけるはずだよ。僕を先頭に！摩耶は殿をお願い！妖精さん！提督に無線をつなぐ準備を!!」

万が一戦況が不利になれば、その都度撤退は提督自身が行うのだ。慢心が一番恐ろしいと学んでいるからこそ準備を怠るわけにはいかない。

「リョーカイ!!」

「わかったぜ!!!夕立！怖いなら、あたしの後ろに隠れてな！」

「陣形の意味ないっぽい？」

「細けぇことはいいんだよ!!それ！いくぜ!!」

早急に陣形を整えながら少しずつ距離を詰めていくと、さらに妖精さんが敵を判別していく。

「テキノヘンセイ!!ヘキュウ1！ホキュウ1！イキュウ3トミユ!!キョリ三〇〇〇〇!!!」

「報告の通りだね。軽巡の射程距離ならまだ打ってこないはず。問題は敵がこちらに気づいているかだけど…」

「二五〇〇〇まで距離が詰まれば、俺の射程には入るけど、一発打っておくか？」

「いや、この距離で陣形すら取らないのは流石に変だよ。もし気づいていないなら先制攻撃ができるはず。ゆっくり近づいて、確実に倒そう。僕は先頭を狙うよ」

「わかった!!じゃあ俺はどん尻をねらうぜ!!夕立はどうすんだ?」

「ん～、選り取りみどりっぽい?夕立は真ん中を狙う!」

「決まりだね。じゃあ一五〇〇〇になったら砲撃を開始しよう。それまでは最大戦速で距離を詰めつつ、接近。いいね?」

「「りょーかい!」」

作戦会議を終えると時雨たちは急ぎ敵艦隊へと近づいた。空気がひりひりする独特な空気を目、耳、肌で感じながらその距離を詰めていく。そして徐々にはっきりと見えてきた深海棲艦は、およそ人とも呼べぬ奇怪な形をしており、海に漂うその姿はただただ気持ち悪かった。

あと少し。そう思いながら射撃準備に入る妖精さんとコンタクトを取りながら、後ろ

の二人にも合図を送る。二人共も頷き、準備は完了したことがわかった。
そしてその時は来た。

「見付けたよ」

その言葉と同時に時雨の主砲が勢いよく火を噴くと、それを見た二人も示し合わせたように敵めがけて砲撃を開始した。やはり敵は全く気づいていなかったようで、慌てて回避運動を取り始めるがもうすでに遅かった。先頭のヘ級に時雨の攻撃が直撃することで、陣形を崩れお互い衝突しないようにするのが精一杯といった感じだ。摩耶の攻撃もど真ん中に命中し、あっという間にイ級は海の中へと消えていく。

「よっしゃあ!!初弾で命中したぜ!」

しかし相手とて的ではない。態勢を崩しながらも主砲を打ち始める。そこにあるのは明確な殺意であり、その見えない圧力が自分の体を刺してくるのを時雨は実感していた。どんどん近づく距離はまるで刀で斬り合っているような感覚に似ている。

そんなことを考えていると、夕立は至近弾を受けていた。たまたまのまぐれ当たりではあるが波は大きく揺れ、バランスを崩しそうになるなか夕立はギリギリ躱していく。駆逐艦にとって一発の直撃は死すら意味してしまうのだ。紙一重の差が生死を分けていく。

「ふにゃぁ!?」

「!?夕立大丈夫?」

「ま、まだまだ余裕っぽい!それよりも敵を殲滅しなきゃ!」

必死に躱しつつ正確な射撃を行う夕立のセンスは、大戦時の活躍そのままだと時雨は改めて目を見張った。砲弾は弧を描いて吸い込まれるように敵に命中し、ヘ級も続いて轟沈していく。

今のところ状況はこちらが有利とはいえ、攻撃をまともに食らえば一瞬で立場は逆転してしまう。そのくらい戦いは危うい天秤の上にある。残りの三隻を早めに決着をつけなければ、そう時雨は考えるとすぐさま後ろの二人に大きな声で伝えた。

「このまま魚雷を発射しよう!!砲撃で包囲しつつ、偏差雷撃で相手にとどめを刺す!!」

「じゃあ、反転しつつ雷撃開始だ!!行くぜ!!」

「素敵なパーティーしましょ!!」

三人の砲撃と魚雷の準備を感じ負けをさとった敵艦隊は、撤退しようと猛スピードをだす。背中を向けつつ必死に当たらぬ砲撃を撃つ彼らは、まさに敗者のそれであった。

「おそいぜ!!」

発射された魚雷はどんどんスピードをあげ、敵を猛追していく。回避は不可能だと思った敵は最後の望みで海中にある魚雷を主砲で破壊しようとするが、すぐに大きな水柱がたったかと思うとそのまま三つの深海棲艦が海の藻屑へその姿を変えた。勝利を確信した瞬間だった。

「よし。これで一安心かな。」

時雨は安堵の表情を浮かべ急ぎ提督へ勝利の連絡をするために無線を取ったのだった。

「いやー、今日の作戦はかんぺきだったな!!俺も今日は無傷で帰れるぜ!!」

三人は無事戦闘を終えると、基地へ向かって進路をとっていた。よっぽど勝利が嬉しかったのだろう、摩耶が嬉しそうに笑う。

「夕立も頑張ったっぽい?提督さんに褒めてもらわなきゃ!」

「二人共ありがとう。今日は助かったよ」

「何水臭いこと言ってんだ!この調子でいけばそうそう負けることなんかないぜ!!なんてったってこの摩耶様がついてるんだからな!!」

「ははは…。そうかもね。てかちょっと痛いかな…」

バシバシと肩を叩かれ、時雨は苦笑いしつつも気分は晴れやかだった。こうやってこれからも無事にみんなで帰ることができたらどんなにいいことか。その幸福感は何にも代え難い。

「でも、油断は禁物っぽい？敵がいたら危ないよ？」

「大丈夫だって!!!ここの海域にはもう敵なんかいねえよ！」

夕立の不安を一蹴していたその直後、それは起きた。

「ワ、ワレテキカンミユ!!!テキハイッセキナレド、カンシュフメイ!!ロクジノホウコウ、キョリ一〇〇〇〇!!」

「げ!!マジかよ!!そんな近くに!?」

「かなりヤバイっぽい!?」

摩耶と夕立が妖精さんの声を聞いて慌てる中、時雨は焦っていた。

（僕たちはさっきの戦闘で弾薬と燃料を消費している…。ここで殲滅できればいいが、応援を出されてしまえば勝てる見込みは低い！）

「時雨！どうする!?にげるか?」

どうするべきか時雨は迷っていた。艦隊を指揮するものとしてミスは許されない。だからこそその迷いは致命的な時間のロスだった。

「テキサラニセッキン!!!サイダイセンソクデツッコンデクル!!!」

「間に合わない?!うそだろ!?」

摩耶がそう叫ぶなか、時雨は背後から敵の砲撃を予測し、思わず目をつぶってしまった。本来であれば一番やってはいけない行為だったが、突然のことに体が動かなかったのだ。しかしいつまでたってもそれは来ない。目を開けて振り返ると、そこには深海棲艦ではない、ある人物が見えてきた。それはまさかの人物であり、時雨自身も衝撃を受けてしまった。

「クマ?·時雨じゃないかクマ!!久しぶりクマ!!」

そこにはクマがいた。

第５話

一七〇〇。俺は時雨から主力部隊撃破の連絡を受けたあと、港でみんなの帰りを待っていた。別にそんな義務があるわけではないが、作戦が成功したとなれば労をねぎらうのが上官としての立場だと思う。話によるとほぼ無傷で勝利したらしいし、夕立は頭を撫でてやるだけで満足するけど、摩耶あたりはうるさくなりそうだな。何かご褒美でも考えとかないと。

ふと、そんなことを考えていると、海の向こうからみんなが帰ってきた。空は見事に真っ赤な夕焼けに染まっていて、そこに笑顔を見せながら向かってくる三人の風景はほんとに絵になる。思わず顔もほころんでしまう。たったひとつ違和感を除けば。

「提督、ただいま。無事帰投できたよ」

そう言いながら少し笑顔見せる時雨。今日も艦隊の指揮が成功したことがよっぽど嬉しいんだな。ここはひとつちゃんと褒めなければ。

「お帰り、時雨。今日の指揮ご苦労様だったな。無傷での帰還はえらいぞ」

「ちょ、撫でるのはいいけど、もう少し優しくしてくれないかな？」

俺が時雨の頭をゴシゴシ荒っぽくなでると夕立が右側から横っ腹めがけてタックルをかましてきた。どこか微笑ましく思えればいいのだが、いかんせん大体艦娘が艤装を付けたまんま体当たりしてきたら普通に吐きそうになる。事故を思い出すじゃねーか！

「あー、提督さん時雨だけなでなでしてずるい！夕立も褒めて褒めて～」

「わかった、わかった！暑いんだから抱きつくな！」

「やっと着いたクマ～」

「よ、提督!!今回はダメージ０なんだから文句は言わせねえぜ？」

今度は機嫌のいい摩耶が、左から肩を組んでくる。朝の件もあってかどうだとばかりに顔を近づけて今日の戦果を自慢してくる。なんか顔がうるさい。めっちゃどやってるよこいつ。

「今日なんて、俺様の主砲が初弾で命中してだな！こう、敵が一発でドカーンって!!すごいだろ!?」

「お腹減ったクマ～」

「提督さん、もっと撫でて欲しいっぽい！」

「わかったって!!だから暑いって言ってんだろ!!摩耶もわかったから離れんかい!!」

ギュウギュウ両サイドから絡まれて若干イライラしてきた。

他の奴らなら女の子二人に挟まれて、傍から見れば羨ましいことこの上ないのかもしれないが、俺はべたべたされるのは苦痛だ。理由は暑いしだるいから。

くそ、時雨まで面白がって笑ってやがる。秘書艦ならこういう時、真っ先に止めて欲

しいものだ。
　でもこんな雰囲気もいいかもな。無事こうみんなで帰って来れて、わいわいするのもたまには。

「クマ？ここが基地クマ？随分と大きいクマ!!」

「そうだね。新しくできたから設備もよく揃ってるよ」

「それはナイスクマ!!楽しく過ごせそうクマ!!」

「おい、ちょっと待て。さっきからお前誰だ」

　そう。さっきからこの和やかな空間に見知らぬ奴がひとりいた。しかもいちいち語尾がおかしい奴が。
　茶髪のロングに丈の短いセーラー服、まあ見た感じ多分艦娘なんだろうがいったいどっから来たんだ？てか話しぶりだと誰かが連れてきたらしい。てかそれ拉致だろ？ヤバくね？

どうせ夕立あたりが連れてきたんだろ。俺は夕立を体からひっぺがすと優しく注意した。夕立も悪気があったわけじゃないしな。

「夕立だめだろ？基地はペット禁止なんだから。しかもわけわかんないの拾うなっていつも言ってるじゃないか」

「夕立は拾ってないっぽい！」

「え？ちがうのか？」

「そんなことしないっぽい！」

なんだ、てっきり夕立が原因かと思ったが違うのか。時雨はないとするとほかには…。

「じゃあ誰だこんなの連れてきたのは？まさか摩耶お前か？」

「なんでだよ!!俺なわけねーだろ!!」

「いや、お前のことだからどうせいらんお姉さん気取りで強引につれてきたんじゃねーかと…」

「そんな非常識じゃねーよ!!俺のことなんだと思ってんだ！」

「おせっかいババア」

「てめぇ、ぶっ殺す」

摩耶の目が殺意１００％になったのであわてて距離を取る。あと五秒遅かったら海に沈められるところだった危ない危ない。

「じゃあこの訳分かんねえの連れてきたの誰だよ!!これ完璧拉致じゃねーか!!」

「クマはわけわかんない奴じゃないクマ!!!」

「うっせーな!!クマクマやかましい!!俺の知ってるなかでそんな喋り方する奴はいないんだよ!!ってか誰だよこいつ連れてきたの!?」

やんややんやと言い合いをしているなかふと見ると、時雨が気まずそうに手を挙げてた。

「まさか、時雨…？」

「ぼ、僕も連絡しようか迷ったんだ。でも万が一断られるのが怖くて…」

「どういうことだよ？」

そう聞くと時雨はあらかた何が起こったのかを俺に伝えてきたのだった。

「球磨は僕と同じ佐世保生まれなんだ。海に一人ぼっちはかわいそうだと思って…」

あらかた説明を終えたところで、時雨はごめんなさいといった表情でうつむいていた。泉もここまでシュンとされると非常に申し訳なくなってきた。

ともあれ、どこの誰なのかがわからないとどうしようもない。泉はまず時雨にフォローを入れつつ、騒動の張本人に詳細を聞いた。

「まあ事情は大体わかったからそんなに落ち込むなよ。で、お前はどこから来たんだ？どこか違う基地のやつとはぐれたのか？」

「そんなことないクマ。球磨も気づいたら海にいたクマー」

「はあ？どう言う意味だ？」

「そのままの意味クマー。目が覚めたと思ったらひとり海にいたクマ。そしたら遠くに時雨が見えたから追いかけたクマ！」

泉が怪訝そうに聞き返すと、目の前にいる球磨がさも当然だと言わんばかりの顔をして言い放った。実のところ球磨にも自分がなぜ海にいたのかは全く覚えていなかったのだ。ぼんやり意識があった時には海にいて、途方に暮れながらさまよっていると、大戦時にも同郷で顔の知っている時雨が見えたので、思わずついていってしまったのが事の真相である。

しかしどうも球磨の言う言葉が理解しきれなかったようで、泉は時雨に説明を求めた。困ったときの時雨である。

「時雨、俺にはいまいちよくわからんが、実際はどうなんだ？」

時雨は内心提督が怒っているかと思い不安だったが、どうやら大丈夫のようだ。その時あるひとつの話を思い出した。

「もしかしたらあれかな？」

「あれってなんだよ？」

「僕も全部わかっているわけではないけど、俗に言う”ドロップ”ってやつじゃないかな？」

「あ！それなら俺も聞いたことあるぜ!!」

自分にもわかる会話だと思ったのか摩耶も入り込んできた。ちなみに夕立はひとり港にいた鳥と遊んでいる。

「なんかさ、敵を倒すとその近くの水域に艦娘が見つかるって事例がたまにあるみたいだぜ？この摩耶様も原因はわからないけどな」

「なんだよ、その謎の現象は？」

泉としても全く聞いたことのない話なのでピンとこなかった。

「だから解明はされてないんだって。一説だと深海棲艦が艦娘の別の姿だって言われてるらしいけど、どうだかな」

「つまり、深海棲艦を倒すことで、奴らは姿を変えて艦娘に生まれ変わるってことかよ？」

「そういうことみたいだね。最もそれが正解なのかはわからないけど…」

「随分と曖昧なんだな。まあいいや。で、球磨はどうしたいんだ？」

とりあえず拉致の線が消せたのは何よりだったが、問題自体が解決したわけではない。球磨をどうしたらいいのかがまだ残っている。そもそもこういった事態に対する規則を泉は知らないので、どうしたらいいかわからなかったのである。

とりあえず目の前にいる球磨に希望を尋ねてみると、若干迷った顔をしつつもはっきりと言った。

「球磨はとりあえずこの基地で生活したいクマ。流石に敵がうじゃうじゃいる海に漂流するのだけはごめんクマ」

球磨も時雨やほかの仲間と一緒に居たい気持ちは同じらしい。

「提督、よかったら球磨も僕たちの仲間に入れたらダメかな?僕たちも戦力は少ないわけだし、球磨は十分強いよ。僕が保証する」

球磨の希望を聴き終えてほっとしたのか、時雨が頼み込むようにそう提案した。

「いいのか?勝手に保護みたいな感じになるけど」

「大丈夫だと思うよ。報告さえすれば特に問題はないし、なにより僕はこのまま放っておきたくないよ」

時雨にしてはかなり珍しくぐいぐい距離を縮めながら押してくるので、相当一緒に居たいらしい。まあ泉としても損な話ではない。

「まあ、確かにそれはそうだがな。じゃあそうするか」

「うん！球磨、君も今日から僕たちの仲間だよ。一緒に頑張ろう！」

「一人の時はどうなるかと思ったクマ。これからよろしくお願いするクマ！」

「じゃあ改めて自己紹介だな。俺は泉だ。よろしく頼む」

「クマー。よろしくだクマ」

軽く挨拶をかわしつつ、無駄話をしていると遊びに飽きた夕立がご飯ご飯うるさかったので、みんなで食堂に向かうことになった。こうしてようやく騒動は一件落着したかにみえた…。

「きゃあああ!!!こっち来ないでえええええ!!!」

「おい、マジでやべえって!!提督どうすんだよ!!!」

「知らねえよ!!摩耶お前ならなんでも余裕なんだろ!?早く行ってこいや!!」

「馬鹿言ってんじゃねーよ!!あんなのどうしろってんだ!?」

「こ、こうなったら僕の１２．７ｃｍで直接狙うしか…」

「そんなんしたら俺たちまるごと吹っ飛ぶわ!!球磨なんとかしろ、新入りだろ!!」

「んな無茶言うなクマ!!球磨にも苦手なものぐらいあるクマ!!横暴クマ!!」

「そういう提督が行ってこいや!!!男だろ?!ビビってんじゃねーよ!!」

「ざけんな!!俺はあいつだけは無理なんだよ!ってうわああ、こっち来た!!」

「「「きゃあああああ!!!!」」」

とりあえず読んでる方には何が起きてるか一切わからないと思うが、端折って説明したいと思う。あのあと泉たち五人は食堂でゆっくりご飯を食べていた。そう、和気あいあいと球磨の歓迎会も含めて楽しくパーティーを行っていたのである。たまたまあったトランプでひと盛り上がりし、その後宴もたけなわになってきた時、テンションの上がった摩耶が料理を作ると言いだしたのだ。みんなも面白がって無理難題な料理を摩耶に伝え、安請け合いした摩耶が厨房で食材を見ていたとき、ついにそれは起きた。いや、現れたのだ。

「きゃあああああああああああああああああああ!?」

残りのみんなで楽しくばばぬきをしていたそのとき、厨房から摩耶の悲鳴が聞こえてきた。とても尋常な驚き方ではない。

「な、なんだ今の声は!?」

「て、提督!!!早く行こう!!」

時雨がそう言いみんな驚きつつ急いで厨房へ向かうと、そこには取り乱しまくってお玉を振り回すエプロン姿の摩耶がいた。どうやら冷蔵庫のあたりに向かっていろんなものを投げているようだが、傍から見たら気が狂ったようにしか思えない。

「頼む!!!た、助けてくれええええ!!!!!?」

「うお!どうした摩耶!?何があった?」

「こ、怖いよ…。あ、あいつが出るなんて…」

「あいつって誰だよ…。ダメだ聞いてねえ」

こちらを見て半ば半狂乱になりながら摩耶が俺の腕に抱きついて助けを求めて来たことに、おもわずびっくりしてしまった。いつもは男勝りで、悲鳴をあげたことなんて聞いた事がない、そんな奴がここまで泣きそうになるとはいよいよ何が起きたのかわからなくなってきた。

とりあえずこれ以上錯乱しないように慰めていると、摩耶はふるふる震えながらギュッと袖を掴んできている。いやはや、いつもこれぐらい乙女なところがあれば摩耶も十分可愛いんだが。そんなことを考えつつ、原因をみんなで探していると、ついにそいつが俺たちの前に現れた。そう、黒くてテカテカしてカサカサ動くあいつが。

「きゃあああ！提督、ゴキブリだ！そっちへ行ったよ！」

「ま、マジかよ!?やべやべやべ!!」

「ぎゃあああ!!何とかしてくれえ!!」

再び摩耶が暴れまくる中、足元を異常な速さで縦横無尽に動き回り回るゴキブリ。もはやこの場は地獄とかしたのであった。

「で…どうするよ?」

地獄から命からがら脱出したあと、泉はみんなと執務室で打開策を練っていた。本来ならこのまま逃げたいところだが、毎日食事の際に神経をすり減らしながら生活するのは健康に悪いし、なによりこのままじゃ摩耶が餓死してしまう。

「うーん、もうどこに潜んでるかわからないからね…」

「ゆ、夕立もう逃げたいっぽい?」

「おっと、そうはいかねえぜ。この摩耶様だけ置いてくなんてさせるもんか…ははは」

よっぽど摩耶は精神的にダメージを負ったのか目は半分死んでいるし、逃げようとする夕立を半ばゾンビのようにしがみついて離れようとしない。

「クマ…。こうなったら誰か生贄にするしかないクマ」

「んなことできねえだろ。あの摩耶見てみろよ、とてもじゃないが正気失ってるぞ？」

「ま、まあ確かに僕もあんなふうに変わるとは思わなかったよ」

「提督さん！ソロモンの悪夢、見せてあげる!!」

「おい。そんなことしたら基地だって無事じゃねーよ」

お互い打開策がないまま悩んでいると、ひとつ時雨が思いついた。

「妖精さんなら…何とかしてくれるかな？」

「あ、その手があったな」

確かに妖精さんのサイズなら隠れていても発見できるだろうし、総動員すれば巣ごと壊滅出来るかもしれない。

「そ、それだ!!!提督、早く行こーぜ!!!!」

希望の光が見えたのか、俄然摩耶もやる気になってきたようだ。

「お前急に元気になったな。でもやってくれっかな?」

「もうこうなったらそれしかないよ。頼みに行こう」

そう言うと、みんなで大量の角砂糖を持って妖精さんのところにお願いしに行くことになったのだった。

その後の展開はあっという間だった。若干困りつつある妖精さんたちも摩耶の必死すぎる顔を見て断れないことを悟り、夜も遅い中１００人近くが集合し厨房を捜索したあと、無事ゴキブリを退治して一件落着となったのである。

このあと摩耶の強いで週一回の害虫予防作戦が実施されるようになったのは言うまでもない。

第6話

一一〇〇。いつものように執務室で仕事をこなしていると時雨が誰かから来た電話を受け取ってそう言った。先日、やっとの思いで製油所地帯沿岸の制海権を取り戻したため、今日も今日とて特に出撃の予定はなくのんびりとした時間が過ぎていたが、急な申し込みなのでびっくりしてしまった。どうも話によるとラバウル基地の精鋭艦隊が視察がてら力試しをしてやるという腹づもりらしい。

「うん。予定では戦艦1、空母1を基幹とする総合演習みたいだね」

「ちょっと待てよ。俺たちの基地に戦艦どころか空母すらいないぞ？どうやってやるんだ？」

そう、自慢ではないがこの基地にはまず四人しかいない。実は資材は大切に使ったほうがいいとの時雨のアドバイスから、攻略作戦で行き詰まるまで建造は控えていたのだ。みんなの練度も上がってきていて、近い海域ならば被弾して帰ってくることも少なく順調に進んでいたのでこんなイレギュラーは予想外である。

「僕もそれを伝えようとしたんだけどね…。なんせ向こうがまくし立てて切られちゃっ

たから、説明できなくて…」

時雨も困った表情していることから、相当向こうも強引に頼み込んできたようだ。

「全く大変だったな。ちなみにいつこっちに来るんだ？」

「一週間後だよ。しかしよりによってあのラバウル基地だなんて…」

「なんだ？なにか嫌なことでもあったのか？」

今度は苦虫を噛み潰したような顔を見せる時雨だが、なにかあったのだろうか？確かラバウル基地といえば海軍きっての要衝で戦力も十分、南方海域奪還作戦の攻略すら任されているエリート中のエリートだったはずだが。もちろん情報は大淀からの受け売りだけど。

「いや、これは以前聞いた話なんだけど…。まず提督は、ブラック鎮守府って言葉知ってるかな？」

「？聞いたことないな。どう言う意味だ？」

「ブラック鎮守府。簡単に言うと僕たち艦娘を道具のように扱って戦果をあげる鎮守府のことさ。被弾したり、疲れが溜まってもひたすら休むことなく出撃させられ、気づいたときには海の底に沈んでいるっていうとんでもないやり方なんだよ」

「そりゃ…なんともひでえな。沈んでっていいのかよそんなことして？」

「まあ、僕たちは一応兵器だからね。軍の中にもそういった効率重視の考え方が根強い

のも確かだよ」

少し諦めたようにそう言う時雨だが、内心ははらわたが煮えくり返る程怒りに満ちていた。確かに自分たちは紛れもない兵器であり、無限に増え続ける敵を倒すために戦う存在かもしれない。でもだからといって文字通り死ぬまで戦わせることは許せなかった。自分たちだって被弾をすれば痛みを感じ、沈む瞬間はこの世とは思えない恐怖を味わうことになるのだ。確かに沈んでも替りはいるのかもしれない。だが死ぬのも事実なのだ。そんな存在すら否定される考え方が蔓延していることが信じられないし、悲しかった。まあそれに関していえば提督はすぐサボるし、全然朝起きなくて大変だけど自分たちのことを第一に考えてくれる。だからこの人についていくことに決めたのだ。

「しかしそんなやつと演習だなんてまっぴらゴメンだ。なんとかならんのか?」

「なんせ向こうの方が階級が上だから難しいよ。僕としてはなんで僕たちと演習を申し込んできたのかが不思議だけど…」

言われればそうである。着任してから三週間、未だ戦力が揃っていない新人提督に申し込むメリットがあるのだろうか。もし手取り足取り戦い方を教えてくれるのならそれは非常にありがたいが、ブラック鎮守府の提督ならば、その可能性も低いだろう。

「まあ意図はわからんが、いずれもう一度挨拶がてらこっちから連絡してみるわ。それよりもやばいのは戦力だぜ?どうするよ?」

「とりあえず妖精さんにお願いしてみよう。それに空母や戦艦が加わるなら戦い方も変わってくるしね」
「そうだよな～。じゃあ一応みんなには後で伝えておいてくれ。いろいろじゅんびがあるしな」
「わかったよ。じゃあ提督は工廠へお願い」
「りょーかい。じゃあ後でな」
そう言うと時雨はみんなに知らせるため部屋から出て行った。さてそろそろ自分も行かなければ。

その後妖精さんに依頼しにいくと、相当いいことがあったのかやたらとテンションが高く喜んで引き受けてくれた。中にはハチマキを締め直して円陣を組みだしたやつまでいるので期待できるだろう。話によると一八〇〇には建造が終了するらしいのでその時間に工廠前に集合することをみんなに伝えて残りの仕事を片付けることにした。ちなみに何もないときほかのみんなは何をしているかというと、球磨はひたすらごろごろ冬眠したかのように惰眠を貪り、摩耶は本土から届いた恋愛小説を興味深々に読みあさり、夕立は非番の妖精さんとかくれんぼをしていた。さすがにここまでだれているの

はどうかと思う。
　そして一八〇〇。みんなでいつものように摩耶と喧嘩しつつ、夕立を構いながら工廠前で待っているとついに妖精さんが奥から連れてきたようだ。
「翔鶴型航空母艦1番艦、翔鶴です。瑞鶴とともに頑張ります！」
「私が、戦艦長門だ。よろしく頼むぞ。敵戦艦との殴り合いなら任せておけ」
「ああ、よろしく頼む。俺が提督の泉だ。見ての通り人数が少ないからな。頼むぞ！」
　そう言って二人と握手をしていると後ろの四人が唖然としていた。何をそんなびっくりすることがあるのだろうか？確かにきっちり要求通りだが、他になにかあったのだろうか？
「ま、マジかよ。翔鶴と長門さんを引き当てるなんて」
「しかも一発クマ。こんなのほかの提督が聞いたら卒倒するクマ」
「提督さん、すごいっぽい！」
「なんだ？そんなすごいのか？」
　てっきり何かやらかしたのかと思ったがそうではないらしい。
「ま、まあね。でも僕も会えて嬉しいよ」
　時雨がそういうと、堰を切ったようにみんなで軽く自己紹介した。どうやらみんなもすっかり打ち解けたようだ。そして時間も時間、夕食時になったため、いつものように

摩耶の提案で歓迎会を行うことになった。もちろん今回は奴が現れることはない。
そしてみんなで食事をしているとき、話題がちょうど演習の話になった。ちょうどいい、説明しとかないと時間は限られている。
「演習ですか？」
くるくる器用にスパゲッティの回しながら上品そうに食べる翔鶴が、少し驚いたようにこちらの方を向いた。
「ああ、朝連絡があってな。翔鶴と長門にも悪いが出てもらう必要があるんだ。なんせ戦艦と空母を編成しろって命令なんだ」
「私は一向に構わないぞ。連携などやらねばならないことがあるが、この長門が提督に勝利をプレゼントしよう」
食べていたうどんをすするとさも当然といったように断言する長門。翔鶴も特に異論はないようだ。
「私も大丈夫です。皆さんよろしくお願いしますね？」
そう言って快く了承してくれる長門と翔鶴を見て軽く感動を覚えてしまった。時雨こそまともな奴だが残りの３人は一癖も二癖もあるためこうした優しさは素直にうれしいし心に来る。
「そう言ってくれると助かるよ。後で詳しい編成や、情報は向こうから聞くがとりあえ

ずは力が出せるように頑張ってくれ」

そうして歓迎会もお開きとなり明日の予定をみんなに伝えたあと、ひとり執務室にもどってラバウル基地に関する資料を俺は見ていた。本来なら時雨も遅くまで手伝っていることが多いのだが、ひとりでどうしても調べたかった。なぜならどうも嫌な予感が拭えないのだ。唐突な演習、ブラック鎮守府だという噂、答えこそ出ないがきな臭さがプンプンしている。

そこでみた事実は、艦娘ではない自分が見ても悪寒がするほどのものだった。

一昨年、建設されたラバウル基地は今までで三人の提督が入れ替わっているようだが、轟沈の数が爆発的に増えたのが現在の提督「嬉野　晃嗣」なってからだ。資料によると嬉野は江田島の海軍兵学校を主席で卒業したエリートであり、以前は海軍の参謀として要職を歴任している。そして４５になった去年、ラバウル基地の提督になったようだ。しかしそのエリートのプライドがそうさせたのだろうか、戦果を上げるために犠牲にした数は１８にも及ぶ。資料からはそこまでしか読み取れなかったが想像するのは容易だった。

「予想以上だな…」

これならあの時雨の怒りに満ちた目も納得がいく。轟沈することが何を意味するかおおよそ大淀から説明を受けていたが、だからこそこの数は異常だと自分でもすぐわ

かった。いったいラバウルでは何が起きているのだろうか？何を思い生活しているのだろうか？

　しかし結論は出ない。なにせ情報がないのだからいかんともしがたい。こうなったらあいつに電話するか。

「ああ、大淀か？俺だが…」

「ああ、提督。お久しぶりです。どうかしましたか？」

「いや、お前嬉野ってやつ知ってるか？ラバウルにいる提督なんだが」

「あ！いまそれに関する仕事をやっていたんですよ」

「どういうことだ？」

「実はですね…」

「…なるほどそういうことか。結果がわかるのはいつごろだ？」

「三日もあればなんとか…。でもこの情報どうするんですか？」

「なに、万が一の時のための保険だよ。もしまたわかったら連絡してくれ」

「分かりました。提督もお元気で」

　大淀との電話である真相をつかみつつ、ついに演習の日を迎えることになった。

「いやはや、出迎え済まないな泉少佐」

きたる演習当日。飛行場で俺と時雨は炎天下のなか嬉野を迎えていた。本来ならばこんなことはしたくないのだが、向こうの階級が少将ともなれば致し方ないのだの時雨に説得されたため渋々表情を作っているというわけである。

大きな音を鳴らしながらラッタルから降りてきた嬉野は、この暑い中軍服を完璧に着こなしその禿げかけた七三の髪をワックスか何かでがっちり固めている姿から、相当プライドを持つ人間だということがすぐわかった。目は官僚特有のような汚れ切っているのも印象深い。

「いえ、わざわざご足労いただきありがとうございます」

こんな敬語死んでも使いたくないのだが、向こうの階級が以下略。

ともあれ演習場を目指しつつ、基地を歩いていく。黙ってついてくる時雨も内心嬉野を軽蔑した目をしているが表情は完璧なのでやつが気づくことはない。

「ふむ。なかなかに設備は揃っているようだな。今戦果はどのくらいかね？戦力は？」

よっぽど自慢したいのかそんなことばかり聞いてくるのが非常に鬱陶しいが、答えるほかない。

「今のところ近くの製油所地帯までは奪還致しました。このまま来週をめどに防衛線まで攻略したいと…」

「ああ、もうわかった。しかしこんな素晴らしい基地をもらいながらその程度では全く評価できんぞ?私などこの前…」

人の話を切っておきながら案の定自慢と嫌味を繰り返してくることにイライラを隠しつつ必死にこらえているとついに演習場に到着した。がしかしそこで見た嬉野の艦隊をみて思わず自分の目を疑った。いや信じたくなかったのかもしれない。

なぜならそこにいた艦娘たちは最低でも小破しているのがみてわかるほどボロボロだったのだ。顔には全く精気がなく、目はこちらが見ても痛々しい程辛そうで、とてもこれが艦娘のあるべき姿だとは思いたくなかった。

「すまんな、生憎第一艦隊を呼ぶ程余裕がなくてな。予備のやつらだがそこそこ君たちの相手にはなるだろう?」

そう言いながらこの姿が当たり前のように笑う嬉野を見て、よく自分がぶん殴りそうになるのを抑えたものだと思う。時雨も珍しく感情をあらわにしつつあったが、目の前のバカはそれに気づくこともなく延々と何かを喋っていた。そんなこともう聞きたく

なかった。
「こちらのメンバーは瑞鶴、金剛、北上、電、鈴谷の五名だ。そちらは六名で構わん」
「そうですか。ありがとうございます。ではこちらの艦隊を呼んできますので準備をお願いします」
もはやロボットのようにはなさなければ感情を爆発させてしまいそうだった。よりによって瑞鶴などたしか翔鶴の妹ではなかったか？あんな姿を何も説明せずに見せるわけには行かない。
そう思うと、急いで時雨と共に食堂に待機しているみんなのもとへ向かった。
「そんな、瑞鶴が…！提督ホントですか!?」
食堂にいたみんなにありのままを伝えた。悲惨で言葉にするのも反吐が出たが、みんな黙って聞いてくれたおかげでなんとか落ち着いて話すことができた。
「ほんとだ。あんなこと信じたくないがな」
翔鶴も妹の悲惨な現状を聞き取り乱さざるを得なかった。隣にいる摩耶も拳を震わせていて、相当とさかにきていることが見て分かる。
「提督どうすんだよ!?あんな奴のところに放っておけってのか!!」
「やめてよ摩耶。僕たちだってなんとかしたいんだ。でもどうしようもない」
「なこといったって…！」

「摩耶やめろ。違う基地に生まれてしまったその不幸を呪うしかない」
「！…クソが!!」
　摩耶のぶつけようのな怒りが、空気を重くしていた。艦娘としての痛みを知るからこそ黙ってはいられないそんな気持ちが余計辛くみんなにのしかかっていた。
　しかしその空気を感じ俺はあることを実行することを心に決めた。こんなどうしようもない事態を救うために。しかしそんなことをやってしまえば、やつはもちろん軍上層部すら敵に回すのかもしれないのだ。でももう我慢の限界だ。ありきたりな正義感ではなくただただあのハゲをぶっ潰すために、俺はすべてをぶっ壊すことにした。
　その後予定通り演習が始まった。そして結果だけ言えば俺たちが圧勝した。まともに補給も受けていないのか、動きは重く長門や翔鶴の攻撃が的のようにあたってしまうのだから当たり前である。しかしそんな光景が目に前にあるのに、未だ自分の権力や強さを誇示し続けてくる嬉野にはもうなにも思わなくなっている自分がいた。そんな時嬉野がこう言ってきたのだ。
「少佐、後で話がある」
　演習後、執務室には両者の艦隊全員、嬉野、俺が全員集まっていた。理由はさきほど嬉野が呼んだからなのだが、嬉野は一体何の話をしようというのだろうか、当の本人は

優雅にソファーに座りタバコをふかしていた。後ろにいる仲間の視線すら全く気にせずに。その姿はもはや滑稽ですらあった。
「今日はありがとうございました。おかげで大変有意義な時間を過ごすことができましたよ。ところで話というのは？」
　早速嬉野に聞いてみると、待っていたと言わんばかりににやりと笑い始めた。
「そうだったな。実はだ、君のところの艦隊をうちにくれないか？」
「…どういうことですか？」
　一体何を考えているんだこいつは。そんなことできるわけないではないか。後ろのみんなも不安そうに顔を見合わせている。
「何、うちは今度南方海域の最深部に突入するんだが戦力が足りなくてな。君のところの艦隊が欲しいんだよ。長門や翔鶴がいるのは好都合だ」
　そう言って汚く笑う嬉野が今日一番気持ち悪く見えた。
「まさか断るわけないよな？私ほどの身分になれば、君の首など簡単に切れる。もし承諾してくれれば、なんでも君の希望を叶えようではないか。いい話だろ？」
「てめえふざけんな！提督がそんなこと…！」
　思わず摩耶が我慢しきれず声を荒げてしまうが、その瞬間、嬉野の目が一瞬で変わった。まるでゴミを見るかのように。

「黙れ。お前ら兵器は我々のために使われる道具だ。おまえの意思など関係ない。人間が安心して暮らすために働けばいいんだ」

まるでそれが宿命のように、低い声で嬉野が言った瞬間、俺の中で何かが切れた。もういいだろう。ここまで我慢すれば上等だ。

「そろそろそのへんでいいか、ハゲのおっさん」

俺が急にそんなこというものだからみんな目を丸くしていた。でももう止まらない。行くしかないのだ。

「だいたいベラベラゲスいこと言ってくれるじゃねーか。あんたみたいなクズが提督をやれてるなんて海軍もたいしたことないな？」

「き、貴様!!!誰にそんな口をきいて…」

よっぽどびっくりしたのか、プライドを傷つけられたのが原因か、顔を真っ赤にして嬉野が怒鳴り散らしていた。そんなことどうでもいい。ただ俺はこいつがムカつくだけだ。

「シラネーヨ。どんだけあんたがエライかそんなこと知ったこっちゃないんだよ。まるで自分が王様になったような気分かもしんないがな、所詮てめえなんざ禿げた気持ち悪いおっさんなんだよ」

静かにでもはっきりと思いつくままに暴言を吐く。ああ、どんどん自分の未来が消え

ていく、もしかしたら殺されるかもしれないな。でもそんなこと知るか。
「だいたいなんだ道具って？こいつらが道具か？んなわけないね。時雨も、摩耶も、夕立も、球磨も、翔鶴も、長門もみんな生きてんだよ。同じ飯食って、寝て、遊んで、喧嘩して、戦って、笑ってさ、人間と何ら変わらねえんだよ。何も役に立たねえハゲは黙って死んでくれ」
「貴様ふざけるな!!これ以上私を愚弄するとただじゃおかないぞ!!」
「はあ？だからなんだよ？お前なんかにビビるとでも思ってんのか？んなわけねーだろ。しまいにはこいつらをよこせって？できるわけねーだろばーか。こいつらは俺の仲間だ、戦友だ！てめえみたいな産業廃棄物にやるものなんか1ミクロンもねーよはげ」
「貴様ぬけぬけと…!!!」
「あと言っとくがな、お前に俺に口を聞く立場にないんだよ。わきまえろはげ」
「なんだと？どういうことだ!!!」
そう聞く嬉野に大淀からもらっていた武器を机に叩きつけてやった。そう、それは嬉野にとって最も突かれたくない弱みがそこには全部かかれていた。
「随分と懐が暖かいみたいだな。そんだけ横流ししていれば金もすごいんだろ？」
そこに書かれていたのは嬉野が行っていた物資の横流しの実態だった。ここ一年基

地に支給される物資の数々、それらを海外へ高値で売りつけていたのだ。しまいには艦娘に対して支給される金銭にしても脅し恐怖で支配したあと全て自分の財布に入れていたのだから救いようがない。

「貴様！一体これをどこで!!」

慌てふためく嬉野はみていて滑稽だ。瑞鶴たちもまさかの展開にどうしたらいいのかわからないようだ。

「幸いあんたのクズっぷりは聞いていたんでな。内地にいる友人にあんたのこと聞いてたんだよ。そしたら黒い噂があるっていうから調べてもらえばこの通りだ。残念だったな、せいぜい路頭に迷いな」

そう、実はあの時大淀に電話をした際、内地でラバウル基地の物資の流れがおかしいことが問題になっていたのだそうだ。そしてそれを聞いた俺は大淀に詳しく調べてもらっていたのだ。彼女は以前話したかもしれないが、事務関係の要職についているため、そういった不正も調べている。また彼女自身もブラック鎮守府を撲滅したいと意見が一致し、ついにこの証拠が手に入ったというわけだ。本来なら来るべきタイミングでちゃんと出すべきだったが出してしまったものは仕方ない。

「くぅ…」

グウの音も出ないといった感じでその場にうずくまる嬉野は、まさに人生の階段の一

気に転げ落ちていく様そのものだった。しかしこいつを貶めることが俺の目的ではない。そう瑞鶴たちを救わなければ意味はないのだ。

「なあ。あんたが言うこと聞いてくれれば少しは助けてやるぜ?」

「な、なんだと!本当か!頼む助けてくれ!」

「じゃああんたのところの艦娘を引き取らせてくれ」

そう。もしこのままラバウル基地の子達がバラバラになればまた同じような辛い思いをしれない。ならまるごと受け入れてしまえばみんな仲良く生活できるという算段だ。幸いこの基地は敷地も有り余っているし。

まさかと思ったのか瑞鶴たちも顔を見合わせ驚きを隠せないでいる。

「そ、そんなことでいいのか?」

ここまで落ちればもうなにも言うまい。提督の風上にもおけない発言のオンパレードだ。

「ああ、そうすれば俺は見逃してやる。その間に金でも持ってにげろよ。言っとくがあと三日もすれば内地から警察が来てゲームセットだ。どうするよ?」

「ああ、わかった!!そうしてくれ!!」

その嬉野の言葉でブラック鎮守府騒動は終焉を迎えた。

後日談。

あのあと嬉野が裏切るかと思ったがそんなことはなく、やつが姿を消したのと同時にラバウルにいた艦娘たちが一斉にうちへとやってきた。相当辛かったのだろう、扶桑あたりは三つ指をついて感謝を述べてきたぐらいだ。無事翔鶴と瑞鶴は感動の再開を果たし今では瑞鶴も元気を取り戻しつつある。以前翔鶴がお礼がしたいときかなくて、膝枕をしてもらっているところを見られたときには艦載機で一日中追い掛け回されたのには焦った。まさかあんな奴だとは…。今では食堂もだいぶ埋まるようになり、基地も賑わいを見せてきた。その後ラバウル基地は無期限休止となり、近くのうちにその役割が回ってきてしまった。大体提督業すらままならないため、時雨にほとんど丸投げしている自分はいる意味があるのかわからんが、それもいいだろう。みんなで一緒に入れるなら。